



ARTRAMBLE

1930(昭和5)年2月にヨーロッパから帰って以来、小磯は、帝展、光風会展、東京美術学校同期生による上社会展といった中央での展覧会に出品する一方、地元・神戸でも目覚ましい活動を展開しています。そもそも1930年前後は、関西の画壇がひとつの大きなまとまりに向かって動いた時期です。1927年、それまで一研究所の発表の場であった信濃橋洋画研究所展が関西一円の画家を糾合する全関西洋画展に発展し、1930年には、神戸で兵庫県美術家連盟が結成されています。元町鯉川筋に日本初の画廊といわれる「画廊」(神戸画廊)もオープン。20歳代後半から30歳代半ばにかけての小磯は、これらをこごとく活躍の場としました。また当時、小磯は山本通1丁目に豪壮なアトリエを構え、若い画家や絵を習いに來る華やかな女性に囲まれて、自身がひとつの中心でした。戦災その他で失われたものも多いこの時期の作品には、アトリエに集う仲間をモデルに制作されたもの

が相当数ありますが、本作品にも、柔らかな光を採りこむ窓、それを反射するテーブルや鏡など、このアトリエとその内部が、金魚の泳ぐ水槽、花瓶と花とあわせて描かれています。この時期の小磯にとって、アトリエは生活と制作を結びつけ、さまざまなものを見る眼とそれを描く意欲を刺激する場であったのでしょう。

本作品は1935(昭和10)年6月、銀座・資生堂で開かれた東京での初めての個展への出品作です。開催の1ヶ月前には、帝展改組が発表され、画壇に大騒動が巻き起こっています。すでに帝展無鑑査の資格を得ていた小磯にとっても、改組内容は納得のいかないものでした。こうした状況下での個展開催は、小磯の安定した実力を世間に示すと同時に、自身のグループ新制作派協会結成への決意を促すものだったのではないのでしょうか。

(西田桐子/当館学芸員)

環境へ

山崎 均

「安藤忠雄建築展2003 再生—環境と建築」が、東京ステーションギャラリーと当館を巡回した。東京、神戸、直島、ニューヨーク、パリ、フォートワースなど世界各地で安藤忠雄が手がけている現在進行中のプロジェクトを含む最近作を紹介するものだ。完成作及び設計段階のプロジェクトが同格に並べられ、彼の建築に対する現在の態度や考えに接することができる貴重な機会だったといえよう。東京会場は、建築家辰野金吾の設計で知られる鉄骨煉瓦造りの東京駅舎内のギャラリーだった。周知のように、この駅舎は関東大震災時にびくともせず迫りくる炎からも逃れたが、1945年5月の大空襲の時に焼夷弾で爆撃されて葱坊主のような形の優雅な丸ドームは焼け落ち、現在は戦後に応急処置されたトラス形の屋根がそのまま乗せられている。震災や戦災による痛手から生還を果たしてきた重要な近代建築である。東京駅といえば八重洲口側の近代的な駅ビルでなく、この赤煉瓦の巨体をまず想起するのではないだろうか。安藤展のための「再生—環境と建築」というタイトルはこの駅のためにあるともいえよう。そして、この駅舎建築の重要性もさることながら、それを近代鉄道というネットワーク環境の中で考えていたドイツ人鉄道技術者ヘルマン・ルムシュッテルとフランツ・バルツァーも劣らず重要と思える。この二人による首都鉄道網や高架線などのグランドデザインに建築家の辰野はよく応えたといえてよく、通過駅として東京駅の構想は見事に今日まで残った。⁽¹⁾

東京と神戸会場ともに、都市ごとに複数のプロジェクトを集めて紹介し、ピノ—現代美術館のプロジェクトの原寸大のガラス外壁のモックアップ模型が大きく紹介された。東京では、地元ということもあり同潤会青山アパートの建替計画が関心を呼び、高層の再開発プロジェクトが進む東京において、低層のまま、このアパートの「再生」のプロセスを呈示することに焦点があてられた。そこには、東京駅のように保存すべきものをどう守って次世代に伝承するかをめぐる粘り強い思考と模索の跡が、高さ制限により地下空間への展開を取り込んだ模型や設計図に示されている。この地下への強い関心は、飯島洋一がすでに指摘したように、インドで出会った数多くの石窟寺院やアーメダバードの地下に降り立つ階段式井戸の空間と都会における地中空間に光を導く「渋谷プロジェクト」といわれる提案との強い関連を思い起こさせるものである。⁽²⁾

さらにいえば、地下空間への関心は、中之島プロジェクトや直島コンテンツボラリーアートミュージアムにおける「環境に埋没した建築」という独創的な試みに明晰に示されているものといえる。安藤建築にみられるこれらの特徴を、松葉一清は「環境」という角度から端的に要約している。

「わたしは、1990年代以降の安藤の作品を「地＝グラウンド」と位置づけてきた。現実には量塊感を伴って存在する「図＝フィギュア」としての建築の表現を彼は可能な限り抑制し、代わって、建築の背景に存在す



図版1: 会場風景/直島コンテンツボラリーアートミュージアム プロジェクト

る「地＝グラウンド」としての青海原や緑の大地を尊重する姿勢を強めていることを受けての話だ。そこには、1980年代のポスト・モダンの潮流の中で、「図」に傾斜しすぎた建築が氾濫して環境の文脈を混乱させたことへの、建築家としての批評精神が表明されている。⁽³⁾

このような批評で意識されているのは、原理的に地下空間に拡がる光庭をめぐる環境であり、アーメダバードの地下井戸のように垂直方向に地中に隠されたサイトスペシフィックな空間であることはまちがいないだろう。それは単に環境という「地」を称揚するものではなく、大地の起伏に沿って散文的に展開されていく水平性や平坦さにくみする建築でもない。むしろ、環境と対話をかわしながら成長し、そこに堅固に住み着こうとする安藤建築の独自性が際立つのである。

ここで、思い出されるのは、1970年代に都市ゲリラ建築として、むしろ社会的な事件として驚きを持って迎えられた大阪の「住吉の長屋」のことである。それは、地下を掘ったわけでもなんでもないが、外部を拒絶しながらもその都市に住み着こうとする強い意志が感じられ、光庭という、空、雲、光、雨、星などの自然を享受できる中庭が設えてある。天空という外部が導き入れられている。「内部」の抛りどころが「外部」の自然であるという反転がみられる。これは地上に地下空間の光庭を持ち上げたかのようなもの、「地上」における「地下井戸」ではないだろうか。この意味において、自然への開かれ方においては、初期の作品から一貫して驚くほどの共通点を見つけることができる。

井戸の底から見上げる空は、周囲を漠然と取り巻く自然ではなく、明快に抽象性を帯びたものであるのも、自然と環境と建築とが相互に干渉しあう建築空間であるゆえだろう。それは散文的な日々の暮らし、叙情的な感受性に、自然との刺激的な出会いと時をたたらす装置になりえる。

当館の展示では、阪神・淡路大震災からの復興をめぐるプロジェクトに力点が置かれた。大阪に本拠地を置く安藤は、関西に多くの作品を実現し、美術館、博物館の代表作もこの地域に集まっている。とりわけ当館は震災からの復興のシンボリックな美術館であり、安藤は美術館と隣接する神戸市水際広場（「なぎさ公園」）との一体化した環境をつくらうとした。なぎさ公園が災害時の物資補給の陸揚げ基地、被災地への重要なターミナルであるように、美術館は建物自体を免震構造として安全な環境の構築に心を砕いている。石造の基壇の丘に3つのガラスの建物を並べ、結果として海からの塩害や災害を防ぐ高さを持たせている。この美術館では、平坦な地面や自然の緑地から直接、コンクリートの壁が力強く立ち上がるというわけではなく、かといって、打ち放しのコンクリートが圧倒的なボリュームを外に晒しているわけでもない。むしろ、それは、ガラスの構造体の箱にコンクリートの箱を納めるというダブルスキン（二重皮膜）の方法で「奥」にしまわれている。当館とほぼ同時に設計がは



図版2: 会場風景/ピノ—現代美術館ほか

じまったテキサスのフォートワース現代美術館をめぐる安藤の言葉の中に、二重皮膜についての由来がある。「ここでは20世紀を代表する素材であるガラスとコンクリートを用いて、今までにない新しい魅力をもった建築をつくるのが私自身の最大の課題でした。試行錯誤を続ける中で発見されたのが、このガラスとコンクリートの二重皮膜構造です。実はこのコンクリートをガラスで覆ういわゆるダブルスキンという表現を考えたのは、1992年に遡ります。ベルギーのブルッセル市内の湖の小さな中島に美術館をつくる計画がロワ・ボードワン財団から持ち込まれ、三度も現地を訪れたのですが、諸々の悪条件が重なって立ち消えになってしまいました・・・」⁽⁴⁾ここから、二重皮膜の構造そのものは、もともと美術館の展示室として着想されたことが伺える。そして、ロンドンのテート・モダン設計案として呈示された後、テキサスのフォートワース現代美術館、神戸の兵庫県立美術館、そしてさらにパリのピノ—現代美術館にその着想は豊かな発展をみるようになった。

このように、2003年の時点では、「環境に埋没する」美術館、いいかえれば地下美術館の系譜とは異なる、二重皮膜というひとつの美術館の構造体の可能性が存在し、かつそれらの構造体の系譜は同時に追求されている。ピノ—現代美術館では、セーヌ川からあたかも離陸しようとする宇宙船のような空中における「光の結晶化された光の空間」が意識されている。当館では、ギャラリー3階南側からの海への眺望がこの二重皮膜による構造体の可能性を最も感じさせるところではないだろうか。

学芸員の視点

この構造体の入れ子の隙間のような回廊空間は、日本家屋の縁側のような両義的な空間としてみなされた。コンクリートの躯体を意識できる外の空間でありながら、ガラスを通じて自然の借景を見通す内側の空間でもある。近年は、この二重皮膜の構造体を支える基壇の石造りの壁に目に染みるような蔭が伸び出した。樹木が生やし、庭園的な感覚を与える新しい環境と皮膜が外壁に生まれている。たとえば中井久夫は、神戸という都市を一次元都市とし、その自然都市神戸の地理の簡明さとその安定感を与える環境をいいあてている。⁽⁵⁾この美術館建築はそうした都市の一次元的秩序を刺激し、リフレッシュする庭園的な環境として、人々の記憶に根づくことをめざしているのではないだろうか。

このように考えてみると、本展は、安藤建築における地下空間を媒介にした環境と光の出会いに向けた持続的な関心とともに、当館のグランドデザインである明快な二重皮膜の構造体の系譜をたどれる機会だったように思われる。

(やまざき・ひとし/当館学芸員)

(1) 鳥秀男編「東京駅誕生—お雇い外国人バルツァーの論文発見」鹿島出版会、1990年
(2) 飯島洋一「水の思想」、安藤忠雄「旅 インド・トルコ・沖縄」住まい学体系/020、住まいの図書館出版局、1989年、p.186-187
(3) 松葉一清「ANDO 安藤忠雄・建築家の発想と仕事」講談社、1996年、p.26
(4) 安藤忠雄「運戦運敗」東京大学出版会、2001年、p.213
(5) 中井久夫他『昨日のごとく』みすず書房、1996年、p.11

開館後の 兵庫県美を 検証する

伊藤 誠



「美術館の夢」展会場風景

＜オープン後の新しい美術館について、これまでの処をひとつ検証してほしい＞という注目を、兵庫県立美術館側から受けた。

この際の＜検証＞というのは、割合美術展に関心を持っている外部の人間への問い掛けとして＜開館以来次々と組立てていっている本館の特別企画展の出来をどう思うか？＞といった辺りがまず気になっておられるのでは、と勝手に推察して話を進めてみる。

美術館で開く展覧には、(1)特別企画展、(2)外へも呼び掛ける館独自の恒例展(県展他)、(3)収蔵品の常設展、などが考えられるが、現在の日本の美術館で恒例展や常設展で以て館運営を十分に果し得ると考えている処はまず無いはずだ。予算が以前より削られて弱っているであろう各地の館でも、それぞれ少ない予算をやりくりしながら、何とかいい内容の、観賞者が沢山来てくれそうな催しという特別企画展の実施に、頭を痛めているに違いない。

その点、県美がこれまでやってきた開館以来の特別企画展は、平均でかなりの合格点を差し上げていい出来だと私は思う。私が県美で接してきた(2003年10月半ば現在)それら展覧は以下の八つ。

私なりに区分して採点してみると―

A――回顧展	会期(年・月・日)	評価(100点満点で)
①「美術館の夢」展	02・4・6～6・23	90
②「ゴッホ展」	9・7～11・4	75
③「英国ロマン主義絵画展」	03・1・28～4・6	70
④「秋野不矩展」	4・26～6・8	85
⑤「クリムト 1900年ウィーンの美神展」	6・28～9・21	80

B――現代美術展	会期(年・月・日)	評価(100点満点で)
⑥「美術の力―時代を拓く7作家」	02・7・13～8・25	65
⑦「未来予想図」展	11・19～03・1・13	65
⑧「安藤忠雄建築展2003・再生―環境と建築」	03・6・5～7・21	70

目下の県美は、従来の県立近代美術館(現在は県美分館・原田の森ギャラリーとして貸し会場業務に専念)の使命をも抱え込んで、(B)現代美術展、の実施も見事に果している。

従って県立美術館が現在進みつつある方向は、大勢として間違っていない。

さて①「美術館の夢」展は、一般観賞者には少し細かい分野にわたる展覧と映ったかも知れないが、美術に心を寄せる者には非常に関心があり、ましてや美術館運営に携わる者なら一度は取組んでみたいと思うテ―

マであったろうし、さらには意欲と裏腹にナマの作品を以てしては少々実現し難いことに気付き二の足を踏んできたにも違いない内容である。

日本の美術館発祥あたりの歴史を、これほどまでに系統立てて表明しカタログにも纏めた展覧は実の処いままでも存在しなかったように思う。

私も以前、そのうち東京を筆頭にどこかの老舗美術館が果してくれるのではあるまいか、と期待した時期もあっただけに＜松方・大原・山村コレクションでたどる＞と添え題してあるにしても(松方・山村両氏は兵庫県に大いにゆかりあり)、地元の美術館が新しい出発を機に口火を切つてこのように立派に実施してくれたことへ対し、心からの敬意を表さずにはおられない。さぞや携わった学芸員諸兄姉の作品収集を始めとする苦労は大変なものだったろう。考えれば、まさに兵庫県美ならではの実現であろうし、この展覧は日本美術館史上不滅の金字塔たり得たと言ってもいい。

②「ゴッホ展」と⑤「クリムト展」は、共にグレート・ネームの画家による作品展だけに、開催前から大勢の人たちが待ちわびた美術展であった。

特に前者は県美開館初年度の実施で、同館の前途を飾るにふさわしい快挙と言え。もっとも、県下では初めてながら日本としては数度目の海外招来「ゴッホ展」であり、今回の内容に関してはいささか物足りぬ点なきにしもあらず、と私は受けとめた。とは言え、一人の画家の大きな作品展をまとめるには、昨今なかなか作品の数を集め難いことが分かるし、前者が＜兄ヴィンセントと弟テオの物語＞と密やかに、後者が＜1900年ウィーンの美神＞とはっきり、一応サブ・タイトルを付け周辺関係者を動員しての展覧とした点、タイトルだけの＜羊頭狗肉＞的美術展が増加してきた折りとしては、まず良心的まとめと受けとめるべきであろう。

③「英国ロマン主義絵画展」は、それなりの構成による無難な内容だったが、④「秋野不矩展」には予期していた以上の感銘を受け、久々に心はればれとして、いい展覧との出会いを実感することが出来た。精魂込めた大作中心の約八〇点は、日本の美術品をもじっくり見直すことの大切さをしみじみ教えてくれた気がする。海外の佳品にじかに接することは、美術作家は元より美術愛好家にとっても大変大事なことではあるが、＜内へ目を向けることも絶対必要＞と、きつく思い知らせてくれた。

国内を含め世界から呼び集めたという現代作家の⑥「美術の力―時代を拓く7作家」展、および関西ゆかりの中堅・若手中心の結集⑦「未来予想図」展からは、地球のアチコチで美術活動は現在も休みなく続けられている、という報告を受けた思いで心強かった(現代を呼吸する美術館として当然取組むべき方向ながら)。が、特に今日的すばらしさの感動を両展覧からもらえるというまでには到らなかった。強いと言えば＜関西の発信人＞に対し今後も一層がんばってほしい、と賛同の拍手を送る気持ちに誘われたことであつたらうか。



「美術館の夢」展会場風景

美術展として少々風変わりな安藤忠雄の⑧「再生―環境と建築」展は、この人が世界各地で実現した、あるいは実現しようとしている建築物の設計や模型の展示で、スケールの大きい建築家の夢をいろいろと推測させてくれて楽しかった。ただし、今度出来た県美の建物自体この人の一作品であり、ここで当面した現実と設計の理想の乖離めいたものには、どうも戸惑いを禁じ得なかった感がある。そして、実際の建物には未だ来館者への＜温かい血の通い＞が籠もっていないのでは、などと僭越なことを考えてしまったり…。これは一体だれの責任なのだろう？ 難しい処だ。

この館の作品展には、収蔵品の小企画展とか常設展などもある。そして時に、担当学芸員の工夫と努力が快く結実していると感じたり物足りなかつたりもするのだが、これら一見地味な展覧のPRはどうも穏和しすぎる。もっと積極的に(例えば特別企画展の宣伝の機会を上手に利用するとか)誇りを持って自館所蔵品とその展示を外部へ報せてほしい。

以上、県美オープン以来の開催展覧について感想を述べてみたが、特別企画展の会期が、ものによって拡大されるようになったのは嬉しいことの一つ(従来は何れも一展覧ほぼ一ヵ月と決まっていたような)。

中味が充実していればいるほど出来るだけ永い展示期間をとって一人でも多くの人に観てほしい、と思うのは当然の理であり、それがまた主催者本来の趣旨にも適はず。さらに、初年度来館者が予定数を大きく突破したという館長の話で「そのうち三分の一近くが美術展以外の人たち」とあるのは、美術と芸術他分野(音楽・映画・舞踊など)との交流をより密にしようと、あえて＜芸術の館＞を標榜した本館の趣旨にかなり添ってきた好ましい結果でもあろう。

ところで、建物に関して一言。今度の県美は、建物の大きさが美術館として国内第二・西日本でトップだとか。美術館の建物は小さいより大きいに越したことはないのだけれど、大きさにこだわって美術館の目

的が忘れられたのではたまたま。私には広い館内の導線が妙に入り組んでいるようで分かり難く、思わず迷って同じ個所を行ったり来たりしたことが何度もあった。特に複数の展覧を観せてもらおうと館内の違う会場へ移る際、それもエレベーター使用の時など、迷ったうえに建物の端から端まで歩かねばならぬことも…。私自身少々足が不自由なので、これは私独りの難儀なのかも知れぬと思つてみたが、会つて美術館のことを話すほとんどの人が「不便な美術館ですな」という。それに「何とも能率の悪い」とも。この建物が単に美術館として孤立したものでなく神戸市水際広場の一環として美観上の役目を持つものだと理解しても、館内に身を置いた際の不安感と苛立ちはどうしようもない(急な階段式ホールなども私は敬遠したくなる)。出来れば、この館が狙いの一つとしている＜憩いの場＞としての在り方を、もう少し掘り下げて考えてほしい。

また、これも外部の者の要らざる思いかも知れぬが、館の利用者や観賞者よりも館内に一番永くいて、いわば美術館の頭脳・行動面で中心的存在となるはずの学芸員の部屋が、如何にも狭く窮屈そうでくお粗末＞と取れたのは、僅かな時間の滞留者の勘違いでなければいいが。館内全体の、あの妙なダダッダさは一体何なのか、と非常に不思議である。

予定の字数がきてしまい、苦情で締め括るような形になったのは何とも残念だが、最後に私がこの美術館に大きな期待を寄せていることだけはハッキリ言っておきたい(苦情めいた物言いが出たのもその故とお許しあれ)。館長以下館全員の諸兄姉に感謝するとともに、(館が現実に抱く短所へ早くメスを入れ)今後一層のご精進を願う次第である。

(いとう・まこと/美術評論家)

神戸新聞美術記者、文化事務局次長を経て、1983年から96年まで姫路市立美術館副館長

見えない中の可能性:

美術の中のかたち—
手で見る造形

2003年7月17日～11月3日

岸野裕人

「作品に触らないでください。」
ショート・エッセイ 「お手を触れないでください。」

美術館や博物館でよく目にする注意書きである。その目的が作品保護のためであることは言うまでもないが、「美術の中のかたち」展では、逆に触ってみませんかと呼びかける。

本展は、視覚だけに頼る鑑賞のあり方に疑問を呈するとともに、美術館を訪れる機会の少なかった視覚に障害のある人々に、直接的な鑑賞への道を開き、併せて施設利用の拡大を目的として企画されてきた。



会場風景

会期中のアンケートをみても、触ることで作品がより身近なものとなり新たな理解を得ることができたといった感想が多い。また、数は少ないが視覚に障害をもつ人々からの賛同の声も寄せられている。確かに目の不自由な人々にとって、展示作品に触るということは最も有効な鑑賞法であり、晴眼者にとっても新鮮な体験であるに違いない。また、アイマスクなどで目を塞ぎ、疑似的な体験をすることによって、目の不自由な人々の立場に対する理解を促す機会にもなっている。ただ、作品の保護のために事前に手を拭き、指輪や腕時計をはずし、荷物を預かって身軽になってもらうなど、この展覧会は鑑賞者に多くのことを注文する。実際のところこうした手続きを面倒に感じ、会場を足早に行き過ぎる人も少なくない。そして注文に従った人の中には、この時とばかりに過剰に反応する人がいることも否定できない。普段から制限されていると感じている人たちの欲求不満からくる開放感、時として企画側の意図の拡大解釈や誤解を生み、予想を越えた行動となってあらわれる。そして担当者は、本展が展示と保護という矛盾が最も露わになる現場でもあることを思い知らされる。

展示すれば、必ずその作品の変化は加速する。目に見えないまでも、かすかな汚れや摩滅によって物質的に変化してゆくことは避けがたい。日ごろ、私たちはこうした状況を劣化という「負」の意識で捉え、できるだけ現状を維持しようと努力している。展示するということは、展示されるものに過酷な試練を強いることでもある。

現在、名品と呼ばれているようなものは、おそらく過去に数々の試練に耐えてきたにちがいない。人の興味を引きつける魅力をもったものは、幾多の場で人々の目に晒され、咀嚼され、さまざまな尺度で吟味される。そこでは必要があれば触るという行為も介在したはずで、結局は人が必要と欲したものが、時という捕えどころのないものをすり抜けて今日にまで残ってきた。やはり触るということこそを「負」とすることに疑問を感じてしまう。

それにしても、例えば生まれながらの盲目の人が、こうした名品を判断する時、触覚だけで捉えたその世界とは如何なるものだろうか。目に頼って暮らす私には想像もできない。ただ、そこには異なる次元の世界が広がっているであろうことを予感するしかない。

残念なことに、私は担当者として幾度か視覚障害の人を案内しながらも、今回の展示作品について彼らとゆっくりと話をすることができなかった。一方的に解説するばかりで、彼らのイメージした世界に会話を展開することをしなかった。いや、できなかった。しかし、まだまだこうした企画も少なく、美術というものが彼らにとって日常的ではないことや、障害の程度や視覚を失った時期に個人差があって、互いの不慣れから話の糸口が見出せない現実も影響していたと思う。その上、視覚優位の潜在意識が私自身にあったことも告白しなければならない。

先のことになるだろうが、こうした展覧会を続けていくことによって、美術というものの存在が彼らの生活にも定着し、それぞれの世界の交差が実現するようになる時がくるだろう。そこにはおそらく新たな造形感覚や価値観が生まれる可能性がある。それは作家にとっても魅力的な新天地になるだろうし、美術自体の広がりを実現することにもつながることだろう。視覚障害者たちに美術鑑賞の門戸を開こうとする本展の試みは、決して後退すべきものではない。それは、本来の目的以上に私たちに多くのことを提案し、美術というものの可能性を問いかけている。



「虚空を去来するもの一椀」密祐快(手前)、「フェイスの連山より」松田一戯(奥)

今回の展示は単純に素材の違いを求めて、木を刻む松田一戯と、シュロ縄を編む密祐快両氏の作品を中心に、館藏品から3点のブロンズを加えて構成した。結果的には但馬という土地に住む現在活躍中の日本の作家と、20世紀をリードした西洋彫刻の大家たちとの造形的な解釈の対比を示すものにもなった。

展覧会の趣旨を説明し出品を依頼した折の二人の作家の反応は、唐突な話にもかかわらず驚くほど理解が早く、申し出に対する質問も的確なものであった。承諾の背景には自然物を素材とし、作品の変化を肯定してきた作家としての日常があったように思っている。二人とも触られることを前提に作品を制作しているわけではないが、触るという過激な鑑賞方法に対する当方の懸念は杞憂にすぎなかった。おそらく、この二人の作品は、堅牢な造形とシンプルな制作意図によって、多くの鑑賞者に安堵感を与えたはずである。

(きしの・ひろと／当館学芸員)

「クリムト— 1900年ウィーン的美神展」 記念コンサート

好評裡に幕を閉じた「クリムト1900年ウィーン的美神展」。ウィーンの世界美術を堪能してもらえたと思いますが、ウィーンといえば「音楽の都」、彼の地の偉大な音楽の一端に触れたいというも人情でしょう。そこで同展では、関連イベントとして、去る7月26日に「ウィーンからの音を聴く」と題したコンサートを開催しました。チェロのベルンハルト・直樹・ヘーデンボルクさん、ピアノの吉澤京子さんというウィーン在住の気鋭の演奏家が、シューベルト、ブラームス、ヴェーベルンの名曲を奏で、まさにウィーン尽くしのコンサートでした。

歌心に満ちたシューベルト、雄渾のブラームスもさることながら、いちばんの聴きものとなったのは、ヴェーベルンの「チェロとピアノのための3つの小品」かもしれません。第一次大戦勃発の年に書かれたこの曲は、わずかに数分に凝縮された表現のなかに、極限の緊張を湛えた名作です。今回の演奏でも、精妙きわまりないピアノニッショムが、会場を息詰まるような空気で満たしました。1883年に生まれたヴェーベルンは、ゲルストルと同年、シーレやココシュカより少し年長の作曲家です。ご来場の皆さんには、世紀転換期に活躍したウィーンのアール・ヌーヴォーの芸術家たちに共通する先鋭な感性を聴き取っていただけたのではないのでしょうか。

このコンサートは、展覧会にご協賛いただいた松下電器産業のご尽力で実現したもので、神戸大学を始めとする学生さんたちに裏方として活躍していただきました。ギャラリー展示室を使った、いわば手作りのコンサートでしたが、展覧会に錦上添花を添える素敵なイベントとなりました。(岡本弘毅／当館学芸員)



ただいま熱演中

美術情報センターの 展覧会図録

美術情報センターでは、画集などの美術図書、展覧会図録、美術雑誌等をご覧いただけます。兵庫県立近代美術館時代に収集した展覧会図録や図書等を、新美術館へ三日がかりで運び込み、開館に合わせて揃えた図書と一緒に、絵画・版画・彫刻・写真・工芸等に分類して棚に並べています。

特に、展覧会図録は、他の美術館等との相互交換により収集したものが大半を占めています。棚に並んだものを眺めているだけでも、「こんな展覧会もあったのか」と楽しんでいただけたらと思います。「ずっと探していたものが見つかりました」と言ってくれた時は、たいへん嬉しく、長年の収集の成果に感謝しました。展覧会図録は、展覧会の記録であり、記憶に残る展覧会をたどることができます。時々、「この展覧会図録を入手するにはどうしたらよいのですか」とお尋ねいただけます。展覧会場でしか入手できないものが多いため、開催した美術館等へお問い合わせいただいています。

美術情報センターには、展覧会図録をはじめ、新しい図書や雑誌が、日々増えています。広い館内を歩き疲れたら、美術情報センターで、展覧会図録や画集を眺めて、アートのそぞろ歩きを楽しむというのはいかがですか。

(荒川信子／当館司書)

2003県展

2003年7月26日(土)～8月16日(土)

今回で41回目を迎えた兵庫県展は、昨年度から今年度にかけて大きく変化しました。昨年度は新美術館の開館に伴い、会場を従来の旧兵庫県立近代美術館から兵庫県立美術館ギャラリーに移して開催され、今回はこれまた新装なった兵庫県立近代美術館あらため「原田の森ギャラリー」に会場を移すことになりました。

2年ぶりでご来場に戻ったわけですが、その他に本年度の大きな変化としては、開催の母体が発行委員会になったことを受け、従来の「兵庫県立近代美術館公募」という冠がなくなり、単に「2003県展」として開催されたことが挙げられます。また、原田の森ギャラリーの運営にあたっている財団法人・兵庫県芸術文化協会が新たに主催に加わり、同協会の賞が新設されました。

改装によって従来とは異なる空間になった旧美術館が会場になることに懸念があったものの、出品者ならびに観覧者の反応は比較的好評でした。出品者については前回に比べ多少は減少しましたが、工芸部門の増加は余暇を過ごす世相を反映しているようで、社会現象としても興味深いものがあります。入場者については増加の傾向がみられ、会場では作品鑑賞もさることながら、かつての近代美術館を思い出して懐かしむ人々の姿が印象的でした。

長い歴史の中でマンネリ化の傾向にある県展が、時代に合った県民主体の展覧会として活気を取り戻し、より活発な美術創作活動の発表の場となるよう願うところです。

(岸野裕人／当館学芸員)



2003 県展会場風景

●——編集後記

●美術館が開館し、2年近くが過ぎた。旧・近代美術館からの移転作業を含めた3年間は、その日その日に追われる慌しさの中で過ぎてきた。そろそろ、自分たちの活動を様々なかたちで見つめ直す必要があるのではとの思いから、季刊誌を発行することとした。情報誌ではなく、情報を消費するだけで終わりにしないための反響と反省の場としていきたい。

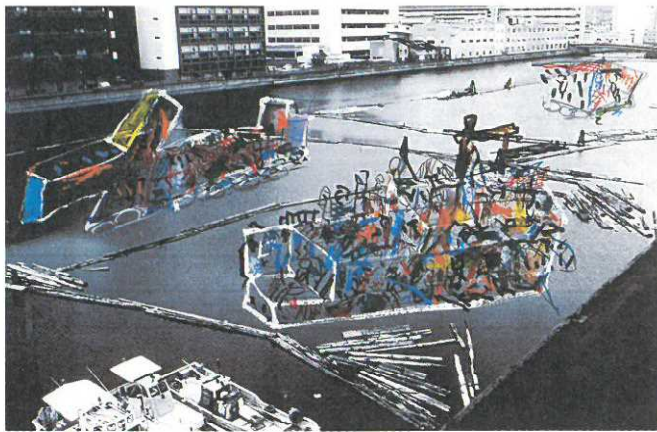
●RAMBLEは、「そぞろ歩き」、「散歩道」を意味する単語だ。おぼつかない足取りかもしれないが、少しずつでもアートの森に分け入っていったらと思っている。美術館の活動も2年目となり、博物館実習生の受け入れや移動美術館など、一時休止していた旧・近代美術館時代からの活動も再開された。開館という非日常が通過したいま、美術館の恒常的な活動を充実させていくべき時期が来ている。この季刊誌が、旧館時代の「ピロティ」を継承することができればと思う。

(服部)

空気美術館 in 兵庫運河

風景とともにあること
あるいは 美術の時間の過ごし方

江上ゆか



堀尾貞治スケッチ「あたりまえのこと(位置を変えれば)」2002年

美術館の周縁

兵庫県立美術館の活動をタイムリーに、かつ少々突っ込んで紹介すべく創刊されたquarterly report「ART RAMBLE」であるが、同時に本誌では当館の活動を出発点に、美術館の周りにも少し目を広げたレポートもお届けしてゆきたいと思う。題して「美術館の周縁」。その1回目として、神戸市兵庫区の兵庫運河で繰り広げられている堀尾貞治さんたちの活動を紹介します。現場を訪ねて考えたことなど記してみたい。

2002年11月から翌年の1月にかけて、当館の開館記念第4弾として開催された特別展「未来予想図～私の人生☆劇場～」関西を拠点に活躍中の現代美術家10名によるこのグループ・ショウに、堀尾さんも出品者のひとりとしてご参加いただいた。その際、堀尾さんが描かれた大量のアイデア・スケッチの中に、展覧会の図録にも掲載されたものなのだが、ここに紹介するような一枚があった。兵庫運河の写真に、係留された船よ

この活動を「空気美術館」と称するのは、運河の四角を美術館的キューブに見立ててのことだという。そう聞くと、まさにスケッチに描かれたような巨視的なスケール感で、まわりの風景とともにこの「美術館」の眺めがたちあがってくるのが感じられる。運河の上、40,000平米の水上市術館。

その3次元の空間には、毎日夕暮れの頃に戻ってくるという水鳥もあれば、潮の満ち引きで上下を繰り返す水面もある。道の途中にずらりとならべられた肘掛け椅子のひとつにすわり眺めると、まるで世界を見渡しているかのような気分さえなる。ここにいると時間の流れ方が変わる、と言う堀尾さん。ここでは空間だけではなく時間も、風景とともにある。「来館者」にとっても、そこである長さの時間を過ごすことが重要なように思われる。ただしそれは単にゆっくりと流れる時間を、ということではないだろう。(蛇足ではあるが、ここはずいぶん年期が入った都市の中の、自然空間なのである)。



現場芸術集団「空気」による「空気美術館」in 兵庫運河



りも巨大な造形物、さらにその上に人の姿などが、なぐりがきのような勢いで描きこまれている。

あまり知られていないことだが、明治時代にその歴史をさかのぼるという兵庫運河は、実は日本最大の運河である。運河という名前は幾分ロマンティックなイメージを想起させるかもしれないが、このあたりは近代都市的な日常風景の広がる一画で、ゆえに筆者などにとっては実に「神戸的」な場所であったりもする。工場街と小学校に囲まれて、矩形に広がる幅約100m、長さ400mに近い水面は、そのすぐ近くに住み生活をしてきた堀尾さんにとって、以前から活動の現場のひとつであった。そして堀尾さんとその仲間たちは現場芸術集団「空気」により、昨年3月末からの長期にわたり繰り広げられてきた「空気美術館」は、まさにこの一枚のスケッチを出発点に、具体化し展開してきた活動と言えるだろう。

もともと木場であった運河に廃材を集め、水の中に道がつくられた。巨大靴のオブジェや、ピンホールカメラの小屋など、さまざまな造形物が出現し、道そのものも延伸を続けて、運河の眺めはどんどん変わってゆく。

最近の美術展では映像作品が大変な隆盛で、「人生☆劇場」展にも映像を使用した作品がいくつか出品されていたのだが、こうしたわたしたちの人生から鑑賞の時間を確実に奪い取る作品を前にすると、日常の時間があまりにも息つく暇さえもないものだから、わたしたちはついそこで何かを急いでしまったりするのだけれど、作品と過ごす時間はほんらい一瞥でもよいし一時間でもよいわけで、そういうわたしたちの存在とともに伸び縮みする時間こそほんらいの、美術とかかわる時間であり、わたしたちがリアルに生きていくと感じられる時間の過ごし方だろう。時間軸で展開する作品の隆盛は、例えばメディアや技術の発達とかいう制作の側面からばかりではなく、生きた時間を共有するという、いわば鑑賞の時間そのものの問題としても考えてみる必要があるのかもしれない。

「空気美術館」による兵庫運河の使用許可は、当初9月末までの予定だったが、めでたく今年の3月末まで延長が認められたということだ。是非一度、現場に足を運び、その時その場の生きた時間を過ごしてみたいかがだろう。

(えがみ・ゆか/当館学芸員)